ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples

木　　偶

ウイルタ
網走市
1958年収集
高さ　14.7cm

北方民族博物館だより
— 第16号 —

第9回
北方民族文化シンポジウム

今年度の北方民族文化シンポジウム（主催：財団法人北方文化振興協会、オホーツク流氷ロード網走市実行委員会）は、11月8～10日の3日間にわたり開催されました。

初日は夕方から講演会が開かれ、『北方の民族音楽－シベリアからグリーンランドまで－』というテーマで北海道教育大学学長の谷本一之氏にお話しいただきました。北方地域の民族音楽に共通する要素として、「太鼓を使った踊り」「動物の声やしぐさをまねる擬声・擬態」「シャマニズムの儀礼に支配されること」の３つを挙げ、特にこのなかの太鼓踊りについて、ご自身が撮影なさったビデオを上映しながら詳しくご紹介いただきました。北欧からグリーンランドまで、太鼓は皮が片面にだけ張られている「一面太鼓」ですが、バチの形には変化が見られ、リズムや枠を叩(たた)くか皮の面を叩くかなど場面や演者によっても叩き方が違うことを述べられ、魂を送るときと迎えるときとで大きく木（枠）の音と皮の音に分けられるのではないかと指摘されました。また、将来的には世界の音楽・芸能地図を作り、それが民族移動や文化変容を考える手がかりになればとのご計画も語っていただきました。

9，10日の両日は『ツンドラ地域における人と文化』をテーマに、人類が厳しい環境に対してどのように適応してきたかについてさまざまな視点から発表と議論が行われました。井上紘一（北海道大学）、岡田淳子（北海道東海大学）、岡田宏明（北海道大学）、荻原眞子（千葉大学）の各氏には座長を、谷本一之、大林太良（当館館長）の両氏にはコメンテーターをお願いし、活発な議論を盛り上げていただきました。以下に、各発表の要旨と討論の概略を紹介します(発表順・敬称略)。

エフゲーニア・アレクセィェンコ
（ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館）
「北部エニセイ諸民族文化の生態」

ケットをはじめネネツ、エネツ、ヌガナサン、北部セリクープ、エベンキといった北部エニセイ川流域にくらす諸民族については、その最も重要な生業の一つであるトナカイ飼育を事例に、人間がいかにして自然環境に適応してきたかという生態学的アプローチをすることで、文化的な諸相が見えてくる。特に橇(そり)・橇の牽引具(けんいんぐ)・衣類などの物質文化を比較すると、それぞれの共通点・相違点がそれらの起源や伝播・発達段階の指標となり、民族の関係やトナカイ飼育の歴史などを考える上で重要なものとなる。

ベングト・ローゼン
（スウェーデン山岳サミ博物館）
「サミの文化　－生業と環境－」

近年、サミの生業をめぐる環境は周辺の社会的・政治的影響を受けて大きく変化している。2000年にわたり、タイガと山岳ツンドラの間の豊かな土地を季節的に移動しながら狩猟・漁撈(ぎょろう)と小規模トナカイ飼育を行ってきたが、今世紀初頭には大規模飼育への移行や定住化がすすみ、通信や移動手段などに新しい文明技術が取り入れられるようになった。一方で、天然資源の開発や自然破壊によって生業活動の範囲も制限されている。また、物質文化も変わってきている。

人間と自然との良好な関係を持続していくには、サミ自身の努力ばかりでなく、引き続き先住民や環境に対する国際的な意識の高揚が期待される。

佐々木史郎（大阪大学）

「ツンドラのトナカイ多頭飼育の二つの様相ーネネツとチュクチの比較ー」

内陸ツンドラにおいて、トナカイの多頭飼育は環境に最も適した生業戦略だといえる。しかしながら、自給自足的な利用だけに頼っていたわけでなく、狩猟民だったシベリアの諸民族が少頭飼育を経て、多頭数飼育を確立させた18世紀後半以降は、ロシア帝国（後にソビエト連邦）の軍事や政治・経済的介入が大きな影響力となっていた。シベリアの代表的なトナカイ多頭飼育民である西シベリアのネネツと東端のチュクチを比較してみると、前者は「商業化型」と名付けることができ周辺民族のコミやロシア人交易者の強い影響下で生まれたものであり、後者は自給自足型といえ、ロシア帝国の圧力に対する抵抗のもとで生まれ、隣接する海岸の海獣狩猟民との協力関係のなかで保持されてきた。社会主義経済が崩壊した近年、生じてきたさまざまな難題にも触れた。

ディビッド・モリソン（カナダ国立文明博物館）

「イヌイト経済に関する考古学的考察」

W．E．テイラーは、それまで先史エスキモーの民族学的モデルとされたきた「海洋と陸上」を対比させる経済上の二分法やチューレ文化から有史のセントラル・イヌイト文化への単線形的な継続性を批判し、イヌイトの経済は多くの要素を含んでいて弾力的であり、歴史的に受け継がれてきたものというよりは地域の自然環境への適応であるとした。カナダ西部極北圏のマッケンジー・イヌイトとその祖先であるチューレ文化を取り上げて、これらのことを検証する。マッケンジー・デルタでは、獲物となる海獣・陸獣・魚という多くの選択肢のなかで季節やそれぞれの状況に応じて柔軟に狩猟・漁撈活動を行い、補完的な利用をすることで食料の安定した供給を得ていた。

スチュアート　ヘンリ（目白学園女子短期大学）

「現代のネツリック・イヌイット社会における生業活動　生存から文化的サバイバルへ」

カナダ中部極北圏のネツリック・イヌイット社会における生業活動の歴史的変遷と生業の文化的意義について、時代を３つに分けて考察する。まず、1960年代までの民族誌の記録とそれに先行するチューレ文化期の生業を比較すると、大型鯨種の捕鯨以外はほぼ継承されている。1960年代以降は定住生活に伴い生業活動が機械化されるなどの大きな変化はあったが、それまでにもさまざまな変化が起きてきたことは確認できる。1980年代から現在においては、生業活動の意義がその経済性にあることは否定しないが、むしろ文化や社会を継承し、イヌイットとしてのアイデンティティを存続させる根本的な活動と考えている。

大村敬一（早稲田大学）

「ネツリック・イヌイットの地理感覚と生業生活域（テリトリー）　生業活動と人間の認知機構との関係について」

冬季には一面氷雪におおわれ長夜が続くツンドラの中で、イヌイットは季節風の方向・海岸線や河川の状態・氷の微妙な変化を目安として、自分の正確な位置を確認し、目的地への方向を割り出すことができる。さらに、イヌイット語の指示詞は、話し手と指示対象の空間的な相対位置に従って微細に分化しており、身体周辺からはじまって生業生活領域全体にいたるまで、短い会話でどこを指しているのか正確に理解することができる。このような地理感覚や空間認知のあり方は、イヌイットの生活の中で狩猟・漁撈・採集の技術に劣らない重要なものといえるだろう。

アレクサンドル・スペヴァコフスキー（小樽商科大学）

「ツンドラ及び森林ツンドラに見られる宗教的世界観の合理的役割ートナカイ遊牧民エウェンの場合ー」

トナカイ遊牧民は、都市部から遠く離れ、救急医療すら不確かなツンドラで一年を通じて暮らさ

ねばならず、独居することも珍しくない。このような状況の下で、精神的な安定を保つために肝要な役割を演ずるのがアニミズムに代表されるさまざまな宗教表象であり、万物に精霊の存在を認める世界観は、厳しい自然環境への適応を可能にした。シャマニズムも同様で、シャマンは病人に心理的効果を与えるだけでなく、合理的な民俗医療の方法を用いて効果的に病気を治療するのである。

高柴修一（早稲田大学大学院）

「極北地域のエスノボタニー―イヌイット、ユッピック社会における植物利用―」

植物の種類が極めて少ないツンドラ地帯に暮らすイヌイット、ユッピック社会に関する民俗植物学（エスノボタニー）的研究は、ほとんどが植物利用についての断片的なものであり、地域的にもアラスカに偏っている。これらの今までに発表された文献をまとめ、自身が収集したネツリック・イヌイットの情報をまじえながら、従来は生業活動の中で付随的にしか扱われてこなかった植物利用の位置付けについて、地域間の比較をとおして考察した。植物は、それぞれの地域において制限された植生のなかでも比較的積極的に利用されてきており、特に食用・灯芯・燃料としての利用は共通して見られた。

齋藤玲子（北海道立北方民族博物館）

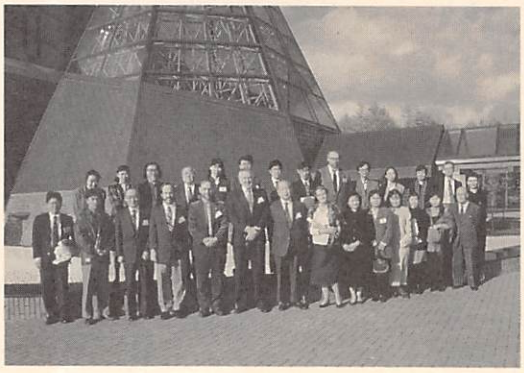
「極北地域における毛皮革の利用と技術」

極北地域において、動物の皮は最も重要な素材の一つといえる。利用されてきた動物の種類は、環境や生業などによって地域的な特徴がみられるが、暖かくて軽いトナカイ皮と耐水性のあるアザラシ皮は代表的である。動物の種類別・また毛皮と鞣めし革（レザー）とでは製革（皮鞣めし）の方法が異なり、北方の民族はどのような処理をすれば、目的にあった毛皮革製品の性質を得ることができるのか熟知していた。民族や地域ごとの技術の共通や相違は、伝播というよりも必要に応じて個々に開発されたからだといえるのではないか。ツンドラ地帯の製革技術は北方針葉樹林帯に比べて単純ではあるが、環境に適合したものであった。

各発表ごとに多くの問題が議論され、パネリストや参加者からは、それぞれの専門領域や対象とする地域・民族についての情報提供やコメントがありました。

総合討論では、先住民が伝統的な生業活動を維持していく意義と、マジョリティー社会（多数派民族・特に欧米型の資本主義社会）の政治・経済システムへの組み込みや自然環境が破壊されていくなかで生業活動をどう残していくかについて、活発な討論がなされました。生業活動が民族の文化アイデンティティを存続させるのに重要な役割を果たしているということについては、多くの同意する事例が紹介されました。また、生物学的に多様な「遺伝子プール」を保持することが生物界全体の存続を可能にしていくように、多くの民族における生業の多様性を維持していくことが、ヒトの生き残り戦略となるのではないかという、人類全体・地球規模での意義についても提唱されました。民族学研究者として、また世界経済の大きな担い手となっている資本主義国の一員として、北方地域の民族文化について我々が持っている知識を一般に普及し、より良い方向を模索する努力が必要ではないかとの意見で討論が締めくくられました。

（学芸課　齋藤玲子）



第2回
博物館フォーラム

博物館と地域研究
「アイヌ文化の成立を考える」

北からの情報発進、地域に密着した博物館活動をめざした博物館フォーラムを12月8日に開催しました。テーマは昨年度に引き続きアイヌ文化の成立を考えるというもので、主として考古学の視点から研究発表、講演などを通してこのことについての理解を深めようとするものでした。

午前は、北海道内で調査研究に携わっている4人の方々に事例研究発表をとおして新鮮な情報や考え方を提供していただき、午後は平川善祥、菊池徹夫両氏から調査研究の現状を踏まえての講演をいただきました。その後、引き続き討論を行ない一日の日程を終えました。

会場には昨年にも増して70人に達する道内外からの参加を得て、このテーマに対する関心の深さを感じさせました。

以下では事例研究発表、講演内容の概要を日程の順に紹介することにします。（敬称略）

〔事例研究〕

武田　修（常呂町教育委員会）

「オホーツク文化にみるアイヌ的要素」

樺太（カラフト）アイヌの文化要素のいくつかがオホーツク文化と共通するという古くからあるとらえ方にたいして、常呂町の常呂川河口遺跡や栄浦第2遺跡の調査内容を素材にして比較し、そのようなことが本当にいえるのかどうかを検証してみた。樺太アイヌとの関連で注目されるオホーツク文化の遺構遺物には骨塚（ほねづか）、クマなどを彫った骨角（こっかく）製品がある。常呂町内のオホーツク文化期の住居跡の骨塚には様々な動物の骨のほかに、骨角器や礫（れき）、縄文時代の土器がおかれたりする。これはアイヌの「送り」思想に通じる要素ではないか。次に墓についてであるが、最近はオホーツク文化に属する埋葬形態として屈葬だけではなく伸展（しんてん）葬の調査例があり、これは擦文（さつもん）時代の伸展葬につながってゆくのかも知れない。またオホーツク土器、それも象徴的な大型土器には動物、水鳥、海獣があしらわれている。このモチーフは、アイヌのエカシイトゥパ（祖印）として継承されているものと共通するモチーフであると考える。

このようにアイヌ文化に通じてゆくいくつかの要素が確実に存在することが実証できつつある。

瀬川拓郎（旭川市教育委員会）

「内陸の擦文文化にみるアイヌ的社会の成立」

17世紀ころのアイヌ社会は、本州の弥生時代中期くらいのレベルであったと考える。そのような社会はどのように始まったのか、その原動力はどのようなものであったのか。それを知る一つの手がかりとして上川盆地における遺跡の分布を見ると、擦文時代はそれ以前の時代の散在した分布とは大きく異なり、石狩川に合流する小河川流域に集中するようになる。その場所はアイヌがポロメム（大きな湧水）と呼んでいた地域と重なる。発掘調査からはそれらの地域に数百の住居跡があったことが分かり、サケの遡上（そじょう）を止める施設も見つかっている。このことはこの地域でサケの大量捕獲、処理をするようになったことを示していると思われる。食料としてだけでなく、毎年決まって安定した収量を約束していたサケは、擦文時代における交易と無関係ではなかった。

交易ルートを知る手がかりとしては、擦文土器底部につけられた刻印がある。この刻印をもった土器は、北海道の日本海沿岸の限られた範囲に分布する。このことはこの地域には精神的・社会的な関係を結べるだけの頻繁な交流があったと推察され、上川盆地はその一端を担っていた。交易によって入ってきたのは生活物資と米であろう。アイヌ的な社会というのは、擦文時代の社会が作り上げた経済体制を引き継いだ社会だと考えることが可能である。

田中哲郎（北海道埋蔵文化財センター）

「チャシとその墓について　ー二風谷遺跡の例を中心にしてー」

数年前、日高管内の平取町二風谷ではポロモイ

チャシ、ユオイチャシを含む、アイヌ文化期遺跡の大規模な発掘調査が行われた。

遺跡全体は1667年降灰の火山灰におおわれており、遺跡を残した人の時期の上限が特定される。ポロモイチャシは明瞭な濠を残している。それにともなう建物跡も発見されている。この建物跡は、チャシ周囲にある建物跡とは明らかに作り方が違うことが分かり、さらに濠との関係でいえば、建物の縄張りを行なったあとに濠を形成していると考えられた。ふたつのチャシに挟まれた平坦地にはアイヌ文化期の墓が2か所見つかっている。墓の回りには円形の溝をめぐらすという特徴のある形態で、このような様式の墓はこの地域ばかりではなく北海道の広い地域に認められるようである。平面形が長方形の墓穴には、遺体とともに副葬品として小刀、山刀などの鉄製品や、椀や盆といった漆製品が出土している。漆器は、16世紀の後半くらいに作られた和産品と考えることができる。チャシに挟まれた広大な平坦地に、象徴的な存在として2基の墓のみしか作らなかったことは、ここを生活の場所にすることを放棄した結果だったと考えられる。他に特徴的なものとしてコイル状の鉄製垂飾がある。これと同じものが常呂町のアイヌ文化期の墓から発見されている。南からの関係ばかりでなく北からの交易の要素も考えのなかにいれる必要がある。

田村俊之（千歳市教育委員会）

「千歳川流域におけるアイヌ文化の成立」

考古学の立場からアイヌ文化を考える手法としては、江戸時代以降に残された記録の中のアイヌ文化のイメージからさかのぼって、最後の土器文化である擦文時代にどこまで物質文化で迫ることができるか、一方、逆に擦文文化からどのように変化して記録にあるアイヌ文化に近づいてゆくかである。

火山灰地帯の千歳川流域では、1739年降灰の火山灰の下から、擦文時代の住居跡のくぼみを避けるようにしてたくさんの平地住居跡が発見されている。そこからは14～16世紀にかけての陶磁器類が見つかっており、それらは遺跡の年代を知る決め手となるのだが、本州人（和人）も同じ場所に居たことが火山灰下の墓の調査で明らかになっている。また遺跡の時代を示すものとして重要な手がかりとしてはキセルがある。今のところ古いものはなく18世紀前半にあてはめることができる。

千歳川流域では、擦文時代の新しい時期に属する遺跡は11世紀ないし12世紀初頭までで、それ以降の擦文遺跡は存在しない。一方、アイヌ文化期の遺跡からさかのぼれる年代はせいぜい15、16世紀が上限である。アイヌ文化を理解するために、クマに対する儀礼的な扱いが問題になるが、かなり広範な調査にもかかわらずそれを示す証拠が集落を中心にした発掘では見つかっていないということでは擦文時代、アイヌ文化期に共通している。

平川氏

菊池氏

〔講演〕

平川善祥（北海道開拓記念館）

「サハリンからみたオホーツク文化」

近年、北海道開拓記念館とロシアとの共同調査やその他考古学研究者がサハリンと交流するなかで、北海道と共通するサハリンの先史時代の内容が事例は多くないものの少しずつ分かってきた。ここでは宗谷海峡をのぞむサハリン南部にある2か所のオホーツク文化の遺跡を紹介し、北海道のアイヌ文化の成立を考えるきっかけにしたい。

ベロカーメンナヤ遺跡は、濠と土塁をともなう遺跡で、戦前の研究者の間では初子浜チャシと呼

ばれていた。この遺跡におけるここ数年のロシアの調査、日ロ共同調査では、オホーツク文化がその地で終末段階を迎えた頃に造られた「チャシ様遺構」であることが判明した。濠でくぎられた範囲には3か所の住居跡があり、これらもやはりオホーツク文化の最終末のものであることが分かった。もう一つのアンフェルツェフォⅡ遺跡は、オホーツク海に近いブッセ湖畔にある集落跡で、北海道のオホーツク文化の竪穴と似た五角形の住居跡とそのまわりにあった内耳土器をともなう貝塚を調査している。竪穴には石器があまり見られないことから、すでに鉄器に置き換っていたということが考えられる。紹介した2遺跡はほぼ同じ時期に形成されたと見られながら、独特な様相を示している。このことはサハリンのアイヌ文化を考える重要なヒントとなる。

菊池徹夫（早稲田大学）

「『擦文以後』をめぐって」

擦文時代以後の調査データはひとむかし前に比較して飛躍的に増加してきており、それを研究者の間で共有できる状況になってきている。

アイヌ文化とは絵図に描かれたような近世のアイヌ文化をさす、ということが典型として考えられがちだが、それは和人とかなり接触したあとの姿である。それでは純粋なアイヌ文化というのがあるのかといえばそれはおそらく15世紀中葉、道南に館が築かれるあたりまでがそうであったろう。

それでは、北海道における最後の土器文化である擦文文化からどのようにしてアイヌ文化が生まれたのだろうか。擦文文化を母体として、それにオホーツク文化が関わってくる構図が一般的であり、その関わり方の大小が論議されることが多い。しかしその際、道南、本州東北部の人間との関わりが抜け落ちているといえる。この地域には独特の文化伝統（土器でいえば、恵山、田舎館、天王山などの土器文化）を連綿と続けてきた人々が暮らしていた。これらの人々はアイヌ文化の形成に無関係であった訳ではなく、むしろそれが主流だったのではないかと考えられる。擦文文化、オホーツク文化ともアイヌ文化の地域的な形成に大きな役割を果たしたが、主体は意外と道南部以南にあったのではないだろうか。以上のようなことを考慮にいれて、あらためて宇田川洋氏が示している「アイヌ文化複合体」の諸要素（クマ送り、チャシ、墓葬、住居、集落などや物質文化）を検証してみる必要がある。

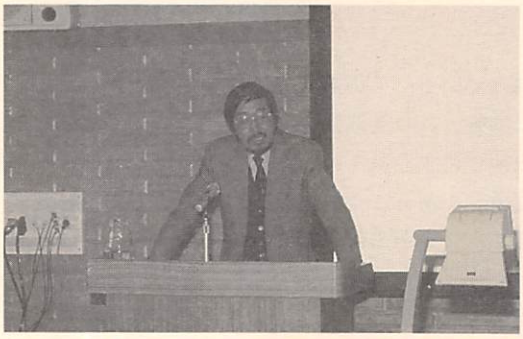
以上が、事例発表と講演の概要でした。フォーラムではこの後全体討論を行ないました。会場内の参加者からは多くの質問や意見が出され、活発なやりとりが展開されました。このうち今回のようなテーマで発表し議論を展開するときに課題となる意見がいくつか寄せられました。「考古学でいうアイヌ文化は、たくさんの文化要素の複合体でありそれはつねに変化しているということは多くの人のなかで一致している。しかし、なにか一つのものを基準にしないかぎりアイヌ文化を考えて行くときの焦点が明確でなくなることも確かである」、「言語学、形質人類学、民族学などを網羅した議論の場からアイヌ文化を定義していってはどうか」といった意見でした。

（学芸課　青柳文吉）

○平成６年度第２回講座

ロシアからみたオホーツク文化

講師／立教大学教授　山浦　清　氏



北海道の先史文化のなかでもとくにサハリン、沿海州との関係が深いオホーツク文化に関する研究は、1980年代頃までは主として北海道における調査や第二次大戦以前のサハリンおよび千島列島における調査結果をもとに行われてきた。近年、ロシア側の遺跡調査に日本人研究者も参加することが可能となり、オホーツク文化あるいは関連文化の遺跡について日ロの共同調査が実施されつつある。10月23日に開催された講座では、こうした新たな情勢のなかでロシア側の出土遺物の分析を行ってきた立教大学の山浦清氏にオホーツク文化についてお話しいただきました。講師は主として土器の形式・特徴、住居址（し）の形式、銛先（もり）の形式・特徴の比較検討をつうじ、オホーツク文化をどのようにとらえることができるのか大変興味深い分析をされ、以下にその要旨を紹介します。

オホーツク文化の研究

昨年サハリンおよびマガダンで調査を行った成果も含め、ロシアにおけるオホーツク文化を考えてみたい。オホーツク文化の研究は第二次大戦前から日本人によって行われてきた。南サハリンにおけるオホーツク式土器の特徴から編年も検討され、古い年代から鈴谷（すずや）－恵須取（えすとる）式、十和田式、江の浦Ｂ式、江の浦Ａ式、南貝塚式などの区分がなされていた。この文化が海獣狩猟の要素をもつことから、エスキモーやアリュートの文化が波及したことを想定する説と、一方ではサハリンで成立したものが北海道に入ってきたのではないかとする意見があった。その後、エスキモー・アリュート説は影が薄くなり、戦後すぐに行われたモヨロ貝塚遺跡の調査などからサハリンで成立したとする考えが強くなってきたと考えている。ロシア人研究者が考えるオホーツク文化の年代は日本よりかなり古く、紀元前１千年紀においており、年代測定用資料の採集に問題がある可能性もある。

文化の拡散と新たな展開

土器の特徴を分析すると、新岡武彦氏が恵須取式とした土器形式が鳥居龍藏収集の資料やその他の出土資料に含まれることから、南サハリンの鈴谷式土器の段階に平行して、北サハリンに恵須取式土器が存在した可能性がある。鈴谷－恵須取式の年代にある住居址にすでにオホーツク文化に特有な竪穴（たてあな）住居の形式がみられる可能性が高く、この段階からオホーツク文化とよんでもさしつかえないのではないか。

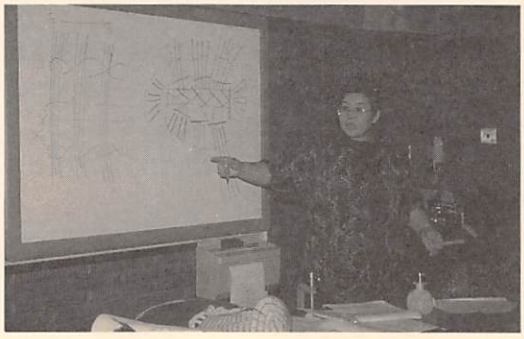
一方、江の浦Ｂ・Ａの段階でオホーツク文化が急速に環オホーツク地域に拡散する要因・背景として、アムール川中・下流域など大陸における政治的紛争、緊張関係をあげることができるのではないか。このことは、多少時代が前後するものの、アムール川流域の豊富な鉄鏃（ぞく）や骨製小札（こざね）（鎧（よろい）の部品）などの武器、武具の存在やウラジオストク周辺における山城址などからも推察できる。大陸から強い影響を受けたサハリンのオホーツク文化は、南は北海道、北ではオホーツク北岸にいたる大きな人間の流れを生み出したと推察される。そして、オホーツク文化の終末の段階でオホーツク海全体をめぐる文化の流れをつくりだし、さらにオホーツク文化以後には、オホーツク海の南、北で交易ルートの確立へと結びついていったのではないか。

最後にスライドでサハリンの恵須取式土器を伴う遺跡の発掘状況や発掘資料、またオホーツク海北岸のマガダン市南西沖にあるスパファリエヴァ島におけるオホーツク文化と類似した内容をもつトカレフ文化遺跡の発掘状況をご紹介いただきました。

○平成６年度第４回講習会

サラニプをつくろう

講師／社団法人北海道ウタリ協会解説員　津田　命子　氏



11月20日には、北海道ウタリ協会で解説員をなさっている津田命子氏を講師に「サラニプをつくろう」を開催しました。

使った材料・道具は、手に入りやすく、初心者が編みやすいようにと選んだシュロのひも（約17m）と、はさみ、万力、霧吹き、ものさしです。またテキストには講師が作成した『ポンサラニプ製作講習会』を使いました。

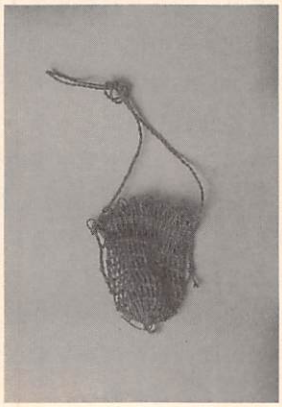
サラニプとは、アイヌ語で編み袋のことをさします。アイヌの人びとは、シナノキの樹皮などを材料にして袋を編み、物を保存したり、運んだりするのに用いました。

実際にはかなり大きなものもあるサラニプですが、講習会では時間の関係もあり、出来上がりがちょうどタバコの箱が一つ入るくらいの大きさのものをめざしました。

シュロのひもはあらかじめ約120cmのものを２本、45cm19本、10cm２本に切り分けておきます。残りのひもは横糸になります。

万力を机に固定し、これに45cmのひも１本の端を結びつけます。このひもを吊りひもと呼びます。サラニプは、はじめに底を作って上から吊りひもでつり、胴部を下に向かって編んでいく方法と、ござ編みの道具を使って作る方法の２タイプがありますが、今回は前者の方法で作りました。

はじめに、120cmのシュロひもから袋の「取っ手」になる部分を作ります。それぞれに指先でよりをかけた２本のひもを、１本によっていきます。シュロのひもは、けば立っているので、霧吹きを使ってすべりをよくします。できあがったひもは、本体が完成するまで横においておきます。



完成品

次に45cmの縦糸６本の端を吊りひもに結びつけ、中心に三つ編みを５cmほど編みます。三つ編みの両端は10cmのひもでほどけないように結んでおきます。これがサラニプの底になります。

それから横糸になるひも６ｍを糸玉にします。この糸玉から必要な分だけひもを引き出して使います。

45cmの縦糸12本の中央を、吊りひもに結びつけ、いよいよ横糸をかけて編み始めます。縦糸４本ずつを三回編んだら、反対側を同様に編み、それから先ほど編んだ三つ編みに重ねて、吊りひもで結びます。次には縦糸を２本ずつとって幅をひろげ、一周編み、そのあとは１本ずつとって編み進めます。

編み終わりは、縦糸の端を二つ折にして編み込み、らせんに編んできた横糸の間隔をせばめていきます。三周ほどぐるっと縁をつくったら、縦糸の残りをはさみで切りそろえます。

最後に、はじめに作った取っ手を結びつけてできあがりです。

時間内に仕上げることができるか心配でしたが、講師の親切でわかりやすい指導のもと、２時間半でほとんどの参加者がサラニプを完成させることができました。力の入れ具合やシュロの糸の太さの違いで、できあがった形はさまざまでしたが、思っていた以上の出来ばえだったようで、花をかざってみたい、また作ってみたいなどの感想がありました。

参加報告

人類学・民族学会連合大会
網走管内博物館連絡協議会

鹿児島大学を会場にして、連合大会が開催されました。この大会において、筆者は「日本人によるオロチョンに関する民族学的報告について」というテーマで研究発表を行いました。以下にその概要を紹介します。

オロチョン（鄂倫春）は、中国東北部（旧満洲）の大興安嶺（だいこうあんれい）、小興安嶺周辺に住む民族である。満洲国（1932－1945）のもとでは、この地域は軍事的理由から、一般の人々の立ち入りが制限されていた。この間、いくつかのオロチョンに関する民族学的調査が行われたが、軍事的色彩の濃いものが多かった。

第48回日本人類学会・日本民族学会連合大会
10.8，9　於：鹿児島

発表ではまず、写真資料「鄂倫春の實相」（横山部隊本部調整）の概要を紹介したのち、満洲国時代における日本人によるオロチョンの民族学的調査研究史を概観した。本資料も、満洲国当時のオロチョン文化について、軍事目的でまとめられたものと考えられる。黒河省南部の遜河県に住むオロチョンの生活について、衣、食、住、社会組織、生業、精神文化などの項目に関し、26枚のモノクロ写真（撮影は1939年12月下旬）と18項目の説明文から構成されている。今まで筆者がみた範囲では、オロチョンに関する数少ない当時の民族学的報告は、大興安嶺に住むオロチョンのものがほとんどであり、本資料は小興安嶺地域における当時の生活を知るうえで、貴重な存在である。

次に、オロチョン文化の地域的特徴およびその背景などを、当時の民族学的報告を比較することで考察した。また発表の最後に、秋葉隆、泉靖一が満洲国当時に収集したオロチョンの民具のスライドを紹介した。これはソウル大学博物館において筆者が1993年９月に撮影したものである。

（学芸課　佐々木　亨）

博物館職員の資質向上を図る研修会において、北海道教育大学函館校助教授の岸上伸啓氏を講師に迎え、講演会「二つの北方 －ロシア国・カムチャツカ半島とカナダ国北西準州の少数先住民族－」が開催されました。概要は以下のとおりです。

今年の夏、フィールド調査を行ったロシア・カムチャツカ半島のコリヤークと、10年来研究対象としてきたカナダ北西準州に住むイヌイトは、ともに植民地化の歴史を経験している民族である。

シベリアの先住民社会では、ロシア人と接触する以前は、狩猟、漁撈（ぎょろう）、トナカイ飼育の３つの形態を組み合わせた生業が行われてきた。コリヤー

網走管内博物館連絡協議会研修会
11.5　於：北見

クも例外ではない。しかし、テンやキツネなどの毛皮を手に入れるために、16世紀後半から17世紀中頃におけるロシアの東方進出により、アルコールと天然痘などの病気が先住民社会に蔓延（まんえん）することになり、伝統文化が滅亡の危機にさらされた。ソ連成立後は、一応この危機は回避されるが、言語などをはじめロシア化が進んだ。

一方、カナダ北西準州のイヌイトの村・ペリーベイは、欧米人との接触が比較的遅く18世紀始めであり、銃などが普及し、生業活動の形態が大きく変化するのは今世紀になってからであった。しかし、1960年頃からカナダ政府による定住化政策が行われ、それにともない貨幣経済が定着するとともに、キリスト教や英語が急速に広まった。

ロシア、カナダにおける２つの先住民社会では、支配者によって持ち込まれた病気、宗教、国家政策などにより、アイデンティティや伝統文化が崩壊寸前になっている。しかし今こそ、国家と先住民との間の相互理解をもって、新たなステップを踏み出す必要がある。　（学芸課　佐々木　亨）

Q&A おしらせ

Q ウイルタの木偶(もくぐう)は、どのように使われたものなのでしょうか。また、シャマンの展示コーナーに双子の木偶がありますが、どういう意味があるのですか。

A　ウイルタの木偶は一般に「セワ」と呼ばれています。その使い方としては、病気に対するお守りやシャマンが持つものなどがあります。

病気に対するお守りとしての木偶は、シャマンが病気治療をした際の、神からのお告げ（託宣）に従って、2、3日のうちに病気をした本人が作ります。これを作ることにより、病人の身体に入った悪霊がそこを離れて木偶に移り、病気が治ると考えられていました。

このタイプのものには、例えば、腰を曲げている木偶があります。これは腰痛の時に用いるものであり、「共感治療」的な意味合いがあるといわれています。また、胃痛などの病気の原因と考えるものをかたどった木偶もあります。このような木偶は、病気が治ったあと、個人的なお守りとして紐(ひも)にくくって吊(つる)されました。

シャマンが持っている木偶は、その人がシャマンになったあとに作られます。その木偶はシャマン自身に取りつく神をあらわしています。海獣、鳥、人体などさまざまなものが象徴化され、用いられています。その神は、木偶だけでなく、シャマンが叩(たた)く太鼓や独特な衣服のなかにも見ることができます。

双子の木偶は、双子を意味する「アダウ」と呼ばれています。ウイルタでは、同性の双子が生れると、狩猟や漁撈(ぎょろう)において良運に出会うと信じられ、崇拝の対象となっていました。このような考え方は、ウイルタの近くに暮らすニブフにもみられます。そしてその双子が死ぬと、表紙の写真のような双子の木偶を作り、これからも獲物に恵まれるようにと願い、祀(まつ)りました。同性の双子とは反対に、異性の双子は崇拝の対象とはなっていませんでした。

（学芸課　佐々木　亨）

これからの主な行事

2/7～ 第9回特別展
3/14 「北方民族の船
　　北の海をすすめ」
※別途観覧料を申し受けます。
2/12 講演会
　　「イタオマチㇷを復元する」
　　講師：秋辺得平氏（北海道ウタリ協会）
2/19 講習会「ワークショップ3
/26 インディアンのビーズベルトをつくろう」
　　講師：青柳文吉・
　　笹倉いる美（当館学芸員）
3/12 講座「北方の漁撈文化」
　　講師：渡部裕（当館学芸課長）

＊講演会・講習会・講座はいずれも午後2時から3時30分までです。これらの行事はいずれも無料です。お申し込み・お問い合わせは博物館までお電話(0152-45-3888)ください。

第9回特別展

北方民族の船　ー北の海をすすめー

平成7年2月7日（火）～3月14日（火）／休館日　月曜日、2月14日

観覧料

一　　般	高校生・大学生	小学生・中学生
250(200)円	80(50)円	50(30)円

かっこ内は10人以上の団体の場合

北方地域の海や川ではさまざまな材料の工夫をこらした船が狩猟・漁撈に、移動に、交易に使われてきました。今回の特別展では北方民族が使用した船を中心に展示し、船が生活の中ではたしてきた役割について紹介します。

News

寄贈資料紹介

○イヌイトの靴　2点

カナダ・イヌイトの靴2点が日野市のスチュアート　ヘンリ氏から寄贈されました。

○古書

村尾元長著『あいぬ風俗略志』（明治25年刊）が、藤沢市の遠藤欣一郎氏から寄贈されました。

○ウイルタの木偶　3点

昭和40年代頃に網走市内で販売されていたウイルタの木偶3点が、市内の寺田弘氏から寄贈されました。

執筆者ならびに出版社から寄贈を受けた書籍（10月～12月）

掛谷誠編『講座地球に生きる　2環境の社会化』雄山閣　1994

秋道智彌『クジラとヒトの民族誌』東京大学出版会　1994

地方史研究協議会編『北方史の新視座　対外政策と文化』雄山閣　1994

大林太良編『岡正雄論文集　異人その他　他十二篇』岩波書店　1994

塩野谷格編『四季ひとびと　1』四季ひとびと同人会　1994

塩野谷格『北太平洋の寸描』中部開発センター　1991

主な来館者

10/1　鳩間用吉氏（那覇市教育委員会指導部長）、阿波連侑氏（同次長）他2名

11/25　野間洋之助氏（釧路地方裁判所長・釧路家庭裁判所長）

観覧者動向　10月～12月

10月	5,292名
11月	1,729名
12月	1,016名

あやとりの様子

みんぞくこうこはくぶつかん in Hokkaido（10月～12月）

10/18　網走市立郷土博物館で「網走周辺の縄文時代」展・市内最古の土器など紹介／ＡＳ他

11/6　網走市の北方民族資料館ジャッカ・ドフニで資料館まつり開催。テントの中ではパネル展／Ｄ

11/15　網走市立郷土博物館と同館友の会共催で「アイヌ文化の伝統料理を学ぶ会」開催／ＡＢ

11/25　「国の中の国・北米先住民族事情」/29まで5回シリーズ／Ｄ

12/1　斜里町立知床博物館で『松浦武四郎・知床紀行集』出版／Ｙ

12/8　アイヌ詞曲舞踊団「モシリ」が東京講演。大使館員らも観賞、民族への関心高く／Ｄ

12/9　10日から始まる「世界の先住民の国際十年」祝い、東京で「エスニックコンサート'94」開催／Ｄ

12/18　「二風谷フォーラム'93」の講演をまとめた報告書『アイヌモシリに集う　ー世界先住民族のメッセージ』を同実行委員会が出版／Ｄ

＊ＡＢ　網走新聞
　ＡＳ　朝日新聞（道東北網版）
　Ｄ　北海道新聞（オホーツク版）
　Ｙ　読売新聞（北網版）

複数紙掲載の場合は、扱いの大きい方を紹介しています。

その他の行事報告

○土曜セミナー

10/8　探検！北方民族博物館

11/12　火おこし体験

12/10　あやとりは世界のあそび

○ロビーコンサート'94

12/27　札幌交響楽団員による弦楽四重奏で年末のひとときを楽しみました。

火おこしの様子

編集後記

シンポジウムに博物館フォーラムと当館にとって大きな行事2つを終え、その報告を掲載したために、今までで一番厚く12ページとなりました。

長時間にわたる講演や研究発表を、わずかなページにまとめるには結構苦労をするものです。しかし、それが学芸員の腕のみせどころというもの。要点をつかむには、内容を十分理解することが必要です。そして難解になりすぎないよう努力をしているつもりです。

地元新聞社の正月特集版に原稿を依頼され、「中学生が解るくらいに…の気持ちで、ちょうどいいと思います」と言われ、書いてはみましたが反応はどうか。肉をそぎ落としてもふらつかずに立っているには、骨がしっかりしていなければなりません。昨年は骨折したので新年は鍛え直します。（齋藤）

北方民族博物館だより
— 第　16　号 —
1995年1月13日発行

北海道立北方民族博物館
〒093 北海道網走市字潮見313-1
TEL 0152-45-3888